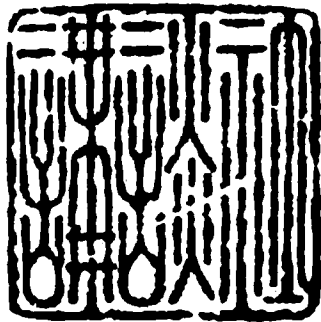


伊藤整日本文壇史

新文學
新學期
の
17



日本文壇史 X



©伊藤貞子 一九七二

昭和四十六年四月十二日 第一刷發行

定價七二〇圓

著者 伊藤 整

發行者 野間 省一
東京都文京區音羽二・一二・一二
長野市西和田四七〇

印刷者 矢島 貞雄
長野市西和田四七〇

印刷所 信毎書籍印刷株式會社
(黒柳製本)

發行所 株式會社 講談社
東京都文京區音羽二・一二・一二

振替口座 東京三九三〇
電話 東京(945) 一二二一(大代表)
郵便番號 一二二

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

Printed in Japan

0391-135700-2253 (0)

寫眞

*

國木田獨歩 「獨歩集」 「運命」 獨歩社

二葉亭四迷 池邊三山 「其面影」とその原稿

*

石川啄木 「あこがれ」 金田一京助 石川一禎

有島武郎と生馬 武郎のスケッチ 武郎の筆蹟（伊豫丸船上から出した手紙） ファニー

*

夏目漱石 漱石の千駄木の家と鏡子夫人 「草枕」原稿

松根東洋城、野上豊一郎、森田草平、小宮豊隆ら 鈴木三重吉 寺田寅彦

*

北斗會會員 若山牧水、中村蘇水、北原射水 人見東明 相馬御風 野口雨情

正宗白鳥 竹越與三郎 足立北鷗 白鳥の筆蹟（上司小劍宛の手紙）

*

泉鏡花 鏡花筆蹟（「註文帳」原稿） 登張竹風 笹川臨風

東京市電運賃値上反對兇徒嘯集事件被告と幸徳秋水、堺利彦 木下尚江夫妻 「火の柱」

目次

第一章

明治三十八年、窪田空穂と吉江喬松と河井醉名——空穂の就職と「まひる野」の出版——空穂と獨歩——獨歩社の創立——獨歩社周辺の文士達——獨歩の地位確立す

第二章

明治三十九年、二葉亭四迷の「朝日新聞」入社——池邊三山の人となり——内田魯庵と二葉亭四迷——「其面影」の成立——「其面影」の反響

第三章

十八歳の啄木と野村胡堂——「少年天才」啄木の登場——啄木と野
口米次郎及び姉崎嘲風——啄木と金田一京助——啄木の東京生活
——啄木の結婚——啄木が澁民村の代用教員となる

三

第四章

有島武郎とファニー——有島武郎の精神的動搖——クロボトキン
有島が訪ふ——有島武郎の歸國——有島家の家族——有島家と山内
英夫

四

第五章

中根重一の死——碧梧桐の全國行脚——「草枕」とそのモデル——
森田草平が大學を卒業する——鈴木三重吉の上京——漱石周邊の人

五

第六章

人——木曜會——夏目漱石の家計と収入——當時の新聞界の實情
——「讀賣新聞」と漱石——「朝日新聞」と漱石

二五

北原白秋の「全都覺醒の賦」の當選——若山牧水が尾上柴舟に認め
られる——同時代の文學青年群——三木露風と有本芳水——車前草
社の青年詩人達

第七章

小説家正宗白鳥——正宗白鳥と平尾不孤——平尾不孤の生涯——讀
賣新聞社會部主任上司上劍——白鳥の「塵埃」

二六

第八章……………二七

徳田秋聲の「小華族」——小説家としての秋聲の地位——三島霜川の生活——霜川の「解剖室」——水守龜之助と三木露風と三島霜川——早稻田詩社の結成——早稻田大學校歌の制定

第九章……………二九

泉鏡花病む——鏡花の逗子移住——鏡花の逗子の生活——鏡花と登張竹風——鏡花の「婦系圖」

第十章……………三〇

日刊「平民新聞」の發刊まで——日本社會黨の結成まで——西川光二郎と「光」——「牟婁新報」と荒畑寒村——荒畑寒村と管野須賀子

第十一章……………三三

幸徳秋水の歸國——秋水の新思想——當時の社會主義雜誌群——日
刊「平民新聞」の創刊の事情——二葉亭四迷と木下尚江——木下尚
江の苦惱

讀者に……………三五

参考文献……………三三

索引

裝 幀 構 成 岡 本 芳 雄

日本文壇史

——新文學の群生期

第一章

1

明治三十八年、窪田空穂と吉江喬松と河井醉茗——空穂の就職
と「まひる野」の出版——空穂と獨歩——獨歩社の創立——獨
歩社周囲の文士達——獨歩の地位確立す

空穂窪田通治が東京専門學校の文學部を卒業したのは明治三十七年の二月である。晩學の彼はそのとき數へ年二十八歳であつた。彼の在學中に東京専門學校は早稻田大學となつたのであるが、専門學校の生徒はその制度のままで卒業した。彼は中等學校の國語教員の免許狀を持つてゐたが、私立學校出身のものが東京で中等學校の教員の席を得ることは困難であつた。窪田通治は、同じ信州の出身者で東京専門學校時代の親友であつた吉江喬松と、この三四年間、同じ下宿にゐたり、一緒に小さい家を借りたりして共同生活をしてゐた。吉江はさきに卒業して、母校の系統である早稻田中學の英語教師をしてゐた。窪田が東京で職を得たいと思つてゐるのを知ると、吉江は「東京朝日新聞」の主筆である三山池邊吉太郎を知つてゐると言つて、就職運動に彼を連れて行つた。

窪田は市ヶ谷の濠の近くの大きな古い平家で、色の黒い、短い髭をもじやもじやと生やした、目の光る池邊三山に逢った。池邊は窪田を親切に扱った。しかし窪田がそのあとで、ロシアの小説を英語から譯したものを吉江の手を通して送ったとき、その出来に満足できないと言つて採用しなかつた。

それから三四ヶ月過ぎた夏に近い日の夕方、窪田の牛込原町の下宿へ突然詩人の醉茗河井又平が訪ねて來た。このとき河井醉茗は數へ年三十一歳である。彼は明治三十三年大阪府堺から上京して本郷の根津に居を定め、「文庫」の詩欄の選者をしてゐた。翌明治三十四年、彼は處女詩集「無弦弓」を刊行したが、更にその翌年數へ年二十九歳で東京専門學校に入學した。そのとき河井は窪田の一年下級に在學してゐたのであつた。しかし「文庫」記者として詩壇に地位もあり、かつ家庭を持つてゐた河井は、長く在學してゐることが出來ず、その翌年なる明治三十六年には退學して、創立して間もない「電報新聞」に入社し、社會面の記者になつた。河井醉茗は「文庫」の選者としての収入だけでは暮せないのも、外の仕事を合せ持たなければならなかつたのである。「電報新聞」は當時宮内大臣をしてゐた渡邊千秋が、その弟の國武を政界へ出すために作つた機關紙で、四ページの小さな新聞であつた。羽仁吉一がその編輯長をしてゐた。

窪田通治は長野縣で小學校の教員をしてゐた當時から與謝野寛が選者をしてゐた「文庫」の歌欄

の投書家であり、與謝野寛の新詩社に加はつた明治三十三年頃から河井醉茗を知つてゐたのである。窪田はその縁で、東京専門學校に在學してゐた當時から、「電報新聞」の和歌欄の選者をしてゐた。窪田は明治三十四年の「文壇照魔鏡」事件のあと「新詩社」を脱退した一人であるが、若い有能な歌人としてすでに認められてゐた。「電報新聞」の讀者文藝欄の選は、新體詩を河井醉茗、俳句を岡野知十、和歌を窪田がしてゐた。入選作品は毎週一回發表され、窪田はその謝禮として月に三圓づつもらつてゐた。

その當時の新聞記者としては珍しく洋服を着た小柄な河井醉茗は、社の歸りだと言つて用件を切り出した。それは今まで三面記者として働いてゐた寒川鼠骨がやめることになつたから、そのあとに勤める氣はないか、といふことであつた。鼠骨寒川陽光はこの時數へ年三十歳であつた。彼は四國の松山市の出身で、明治二十六年、京都に復活された第三高等學校に入學したが、途中で退學し、上京して郷里の先輩である正岡子規に近づいて俳句を學び、新聞「日本」で働いてゐた。「電報新聞」が創刊されると彼はそこへ入社したが、このときそれをやめて新聞「日本」と同系の月二回發行の雜誌で、三宅雪嶺が主筆をしてゐた「日本人」に移つたのである。

窪田通治は河井醉茗の獎めに従つて「電報新聞」に入ることになり、二三日後に河井に連れられて羽仁吉一を麴町の家に訪ねた。そして彼は麴町區有樂町の數寄屋橋の近くの「電報新聞」に勤め

た。その新聞社は新築のものであつたが、その規模も小さく、社屋も極く小さなものであつた。窪田の月給は二十圓で、和歌欄の選料もその中に含まれることになつた。その當時、東京専門學校出身の者は、地方へ中等學校の教員として行けば四十圓ぐらゐの俸給を得たが、東京に留まればその半額といふのが常識となつてゐた。また東京帝大には特別の權威があつて、その卒業生ならば新聞記者をしても五十圓にはなると言はれた。

2

窪田通治は、「電報新聞」に入社した翌年の明治三十八年九月、處女歌集「まひる野」を出版した。この歌集に對しては、與謝野寛、尾山篤二郎、土岐善麿などが賞讃の言葉を述べ、また彼の身邊に、松村英一、半田良平、對馬完治、宗不旱などの若い歌人が集まつた。

この明治三十八年の七月國木田獨歩の「獨歩集」が近事畫報社から刊行されたとき、彼は「電報新聞」の新刊紹介欄でこれを取り上げ、異例の長い批評的な紹介を書いた。窪田通治は東京専門學校に在學中、友人の水野葉舟、平塚篤等とともに「山比古」といふ同人雜誌を出し、特に乞うて國木田獨歩の「運命論者」を載せたことがあり、それ以來、獨歩に對しては親しみを抱いてゐた。またその當時窪田と同宿してゐた吉江喬松は、早稻田中學に勤めてゐたが、獨歩に近づいて、しばし

ば近事畫報社へ遊びに行つてゐた。やがて吉江は、早稻田中學で英語を教へるとともに、近事畫報社にも勤めるやうになつた。「獨歩集」に對する窪田の紹介が出たとき、獨歩はそれを讀み、大變喜んで、これは「獨歩集」についての紹介や批評のうちで最も良いものだと言つたことが、吉江の口から窪田に傳へられた。

その翌年の明治三十九年の初夏、窪田は、二年ほど勤めてゐた「電報新聞」から突然一通の手紙が届いて解雇されたことを知つた。その理由は分らなかつたが、この時、全社員が解雇されたのであつた。この頃通治と吉江喬松は牛込榎町に小さな家を借り、通ひの老女中に炊事をしてもらつて暮してゐた。窪田はこの時期小説に志を抱き、近事畫報社の「新古文林」の四月號に「疑問」といふ作品を發表し、五月號には「夢と現」を發表してゐた。暇になつた窪田に對して、吉江は獨歩が逢ひたがつてゐるから、遊びに行かうと言つた。

この年の春頃、近事畫報社はいよいよ立ち行かなくなつて、社長の矢野龍溪は解散を決意してゐた。それは戦争が終つて、戦況に關心を持つてゐた讀者が離れるとともに、新聞の寫眞製版術が發達して、しきりに寫眞を載せ、對抗できなくなつたからであつた。だが社員たちは解散を残念がり、自分たちの手で續刊しようと言ひ出した。そして編輯長の獨歩が押されてその中心になつた。獨歩は自分の手で經營に當る決意をし、獨歩社なる名の新社を興して、八月號から社名を改めた。

編輯者としては畫家の小杉未醒と満谷國四郎の外鷹見思水と孤雁吉江喬松などがゐた。前から引き續いての刊行物には、「近事畫報」の外に「婦人畫報」、「少年知識畫報」、「少女知識畫報」があり、また、文藝雜誌の「新古文林」をも發刊してゐた。

窪田通治が櫻田本郷町の獨歩社へ行くと、獨歩は彼を喜んで迎へ、「遊んでゐるのなら、よい口があるまで社に來ないか、食費ぐらゐは出せるよ」と言つた。それで何となく窪田は獨歩社に勤めることになり、毎日牛込神樂坂下から外濠電車に乗つて芝の獨歩社まで通ふやうになつた。このとき國木田獨歩は數へ年三十六歳で、窪田通治は三十歳であつた。

獨歩社の編輯室はその建物の二階の十二疊敷きの座敷であつた。床の間から入口のガラス戸の方へかけて鍵の手に机が並べてあつた。床の間の前にあるのは獨歩の専用であつたが、獨歩はその前に坐つてゐることは少く、たいてい室の中央にある火鉢の前に胡坐をかいて、數多い來客の誰かと雜談をしてゐた。ほかの机は誰の専用といふことがなく、空いてゐるものを皆が使つた。編輯者たちはよく出歩いてゐたから、いつもどの机かが空いてゐた。この編輯室は小さなクラブのやうなものであり、色々の文士や友人達が次々とそこへやつて來た。獨歩の親友で鎌倉時代に彼と同居してゐた齋藤弔花、中澤臨川、阪本紅蓮洞、平塚篤、小山内薫、武林盤雄、生田葵山、三島霜川などで、その中には小山内や武林のやうにまだ大學に席のある青年文士もゐれば、阪本や生田のやうにいつ

まで経つても文壇の本流に乗れない除けものもあつた。

かういふ文士たちが獨歩社へしばしば立ち寄つたのは、文藝雑誌の「新古文林」が一つを中心になつてゐたからである。「新古文林」が創刊されたのは前年の明治三十八年五月である。その創刊號には、廣津柳浪、小栗風葉、柳川春葉など硯友社系の主要な作家の小説を載せ、その外に獨歩の友人である田山花袋が小説「歸航記」を書き、工學士で文藝評論を書いてゐた中澤臨川がユーゴーの短篇を譯して載せた。獨歩はその第一頁に「發刊の辭」を書いただけであつた。この明治三十八年に文藝雑誌として通る雑誌を作るには、やつぱり硯友社系の文士の作品を並べる外なかつたのである。そして、この雑誌はその年から翌明治三十九年にかけて、饗庭篁村、宮崎三昧等の舊人から、三島霜川、齋藤弔花、生田葵山、徳田秋聲、徳田秋江（後の近松秋江）、武林盤雄等の新進作家の作品を載せた。創作力の旺盛でない獨歩は明治三十九年に入つてから三月號に短篇「田舎教師」を載せたただけであつた。

「新古文林」は、その時の主要な文藝雑誌なる博文館の「文藝俱樂部」、春陽堂の「新小説」、金港堂の「文藝界」と並んで、一應は文藝雑誌の面目を保つてゐたが、近事畫報社が經營不如意になるに従つて、稿料を拂ふことができなくなり、稿料なしでも作品を發表したがる新作家にその舞臺を提供するやうになつてゐた。